

報 告

京あんしんこども館の活動—10年の成果は？

澤田 淳¹⁾, 大矢 紀昭²⁾, 加藤 康代³⁾, 高峯 智恵⁴⁾
中辻 浩美³⁾, 長村 敏生⁵⁾, 清澤 伸幸⁶⁾

〔論文要旨〕

日本では長年少産少子化が続いている。その原因の一つに核家族化や女性の社会進出がある。その結果、高齢出産が増え、育児支援者が減少して母親の育児不安が目立っている。そこで、子育て支援の一助として、母親の育児不安を解消するための相談事業と子どもの事故防止事業を推進することを目的に、京都市では平成16年8月に「京都市保健医療相談・事故防止センター(京あんしんこども館)」が創設された。10年間にセンター内のセーフティハウスの見学者は26,042人、子育て不安の解消のために設けた電話相談を利用した人は11,370人で合計37,412人と接触した。

10年間に行った事故防止のための事業、子育て不安相談のための事業の内容と実状を報告し、来館者や電話相談の結果の満足度を評価考察し、今後の方向を探索した。

Key words : 京(みやこ)あんしんこども館, 10年間のまとめ, 来館者, 電話相談, 満足の種類

I. はじめに(設立の経緯)

10年前の平成16年8月、京都第二赤十字病院に隣接し廃校になった小学校跡地に、「京都市子ども保健医療相談・事故防止センター」(以下、京(みやこ)あんしんこども館)が京都市により開設された。目的は、少産少子化時代に子育て支援として親の育児不安を解消するための相談事業と、平成16年開設当時の小児期の死亡原因の第一位を占める不慮の事故(790人死亡)を防止するための事業を行うことであった。廃校当時から「子どものための事故防止」の必要性を京都市に依頼していたところ、7年目に念願の日本で初めて

の京都市「京あんしんこども館」の建設が京都市議会で決まり、子ども保健医療相談とともに事故防止センターができた。この施設の事業内容は、子どもの保健医療相談と子どもの事故防止で、子育てに安心・安全な地域にしたいと活動してきた。10年目には、不慮の事故による死亡は371人(平成25年度)に減少したので事業内容と活動状況を報告し、今後の方向を考えてみた。

II. 施設の概要¹⁾

当館は、京都市のほぼ中央に位置し、御所の西、府庁の南、京都第二日赤の南隣に位置し、延べ床面積約

Are Activities of the Kyoto Healthcare Counseling and Injury Prevention Center for Children from 2004 to 2014 effective ?

Tadashi SAWADA, Noriaki OYA, Yasuyo KATO, Chie TAKAMINE, Hiromi NAKATSUJI, Toshio OSAMURA, Nobuyuki KIYOSAWA

- 1) 京都市子ども保健医療相談・事故防止センター(京あんしんこども館)(小児科医師/センター長)
- 2) 京都市子ども保健医療相談・事故防止センター(京あんしんこども館)(小児科医師)
- 3) 京都市子ども保健医療相談・事故防止センター(京あんしんこども館)(看護師)
- 4) 京都市子ども保健医療相談・事故防止センター(京あんしんこども館)(保健師)
- 5) 京都第二赤十字病院小児科(副部長)
- 6) 京都第二赤十字病院小児科(部長)

別刷請求先: 澤田 淳 京都市子ども保健医療相談・事故防止センター(京あんしんこども館)

〒604-0091 京都府京都市中京区釜座通丸太町上る梅屋町174の3

Tel : 075-231-8002 Fax : 075-231-8003

Presented by Medical*Online

[2693]

受付 14.11.17

採用 15. 4. 2

800m²の鉄筋コンクリート2階建て（一部地域利便施設一地区自治会・消防団・会議室などを含む）で、1階は研修室（120人位の講義、実習が可能）、2階は事務室、相談室、フリールーム、セーフティハウスがある。職員は小児科医2人、保健師1人、看護師2人、事務2人でローテーションを組んで勤務している。

セーフティハウスには玄関、居間、階段、洗面所、トイレ、ダイニングキッチン、浴室、寝室、洗濯機、ベランダなどの各部屋に60余りの危険物や場所を提示している。誤飲・誤嚥などの異物展示コーナーにはホッチキスの針、押しピン、ボタン電池、硬貨類など実物の異物の展示やレントゲンフィルムに映し出された異物像を説明している。戸外での事故防止として、ベビーカーや幼児2人同乗自転車の使用時の注意や、チャイルドシートの必要性を理解してもらう交通事故のDVDを視聴してもらい、ISOFIX型チャイルドシートの説明や安全グッズなども展示している。子どもたちにとって危険な場所はどこか、危険な物は何か、どのように対応できるかを見学者に説明、理解させ、具体的な予防法を指導している。

開館時間は10～18時（木曜日は12～20時）で、月曜日休館（祭日にあたる時は開館し、その翌日が休館）。職員は、講習会や研修会などの開催日は、見学者1～15人に1人の割合でセーフティハウスの説明や心肺蘇生法の実習を指導している。この施設の利用は京都市の住民に限らない。当館主催の講習会・研修会・見学・電話相談などの事業は資料も含めて全て無料である。

Ⅲ. 当館の10年間（平成16年8月～平成26年3月）の事業内容・業績結果

来館者数（表1）と団体、グループ研修（表2）

平成26年3月までの見学者数は26,046人、年間平均来館者は約2,600人で、個人来館は1,420人であった。来館時には、匿名で、性別、年齢層のみ記載し、セーフティハウスの見学と説明をしている。またフリー相談目的で来館される人や見学のついでに子どもの心配事の相談をされる人もある。団体・グループでの研修、見学者の内訳は年間平均来館者1,200人であった。

参加者は京都府以外からの参加も多く、行政からの視察は127ヶ所からで、消費者庁、厚生労働省の職員、国会・県会・市町村地区議員、役員まで全国から見学があり、教育関連では大学、専門学校、幼稚園・保育園、子育て支援関係、地域のママさんグループ、病院

関係、企業・その他で572グループを受け入れている。原則10人以上であれば講義を行っており、これまで概ね500回となった。また当館のホームページ閲覧件数は10年間で72,794件であった。

Ⅳ. 10年間の保健医療相談集計結果

1. 保健医療相談の方法

小児保健医療相談事業は、主に電話で相談を受けている。他府県や海外からでも可能である。職員が専用電話を通じて、ベテラン保健師・看護師が相談事項を聞き、必要に応じて常在の小児科医に繋ぎ、対応している。「電話相談メモ」カードには匿名で、相談対象児との関係（主に母親）、出産順位などや、対象児の年齢・月齢、性別、出生時体重・在胎週数、住所、相談者の年齢、主たる相談内容を記載している。電話以外の相談に関しては、複雑な相談や診ないとわからない、あるいは時間を要するものは予約相談で来館してもらっている。これらの相談に対応し対処できない時には、適切な専門医療機関を紹介をしたり、保健センター、児童相談所、教育委員会とも連絡をとっている。

2. 相談内容の数と種類

これまでの電話相談件数は9,725件、特に長時間の面談を必要とする小児精神疾患や発達障害に関すること等527件は電話で予約後に来館してもらった。さらにフリー相談は1,118件あり、合計11,370件であった（表3）。

11,370件の相談内容を10項目に分類し表4に示した。1位は疾病33.7%（3,829件）、2位は事故で15.8%（1,792件）、3位は便や尿の性状などの一般生理で11.8%（1,346件）、以下、身体・運動・精神発達を発達としてひとまとめにすると16.6%（1,891件）と2位で事故以上となる。相談の1位であった疾病の内容は開設後約5,000件の時の調査結果²⁾では1位が熱、2位は嘔吐・下痢、3位が発疹、4位が耳鼻科的愁訴（鼻出血、鼻閉、耳が痛いなど）、5位は咳であった。上位5位までで75%で、皮膚科、耳鼻科的相談が多かった。ほかに眼科、歯科、小児外科的相談があったが、通常の病院・医院の受診紹介で対処できた。今回の1万件を超えた相談でも、ほぼ同じ（現在解析中）で緊急性の高いケースはなかった。ただし、予防注射対応、発熱時対応などの通常の緊急対応を含めて「かかりつけ医」を持ちなさいと指導している。

表 1 10年間の来館者数集計

(単位：人)

	平成 16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	合 計
個人来館者	1,303	1,738	1,618	1,942	1,708	1,175	1,409	1,145	1,092	1,062	14,192
団体来館者	832	1,197	896	1,218	1,199	1,320	1,327	1,270	1,295	1,300	11,854
合計	2,135	2,935	2,514	3,160	2,907	2,495	2,736	2,415	2,387	2,362	26,046

表 2 10年間の団体・グループ研修集計

(単位：件)

団体・グループ別	平成 16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	合 計
行政（視察含む）	39	20	23	13	9	9	6	2	2	4	127
大学・高校・看護学校	3	8	12	19	20	26	26	23	20	26	183
幼稚園・保育園関係	2	9	6	6	8	6	7	5	8	10	67
子育て支援関係	11	17	11	18	19	14	17	10	14	4	135
病院関係	1	6	4	4	4	4	5	4	3	3	38
企 業・その他	2	0	4	5	1	1	2	5	1	1	22
合 計	58	60	60	65	61	60	63	49	48	48	572

表 3 10年間の保健医療相談件数集計

(単位：件)

相 談 別	平成 16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	合 計
電話相談	186	615	971	1,048	1,184	1,155	1,184	1,228	1,106	1,048	9,725
予約相談	31	68	80	86	79	41	48	34	30	30	527
フリー相談	63	25	55	85	116	98	149	177	167	183	1,118
合 計	280	708	1,106	1,219	1,379	1,294	1,381	1,439	1,303	1,261	11,370

表 4 10年間の保健医療相談項目別件数集計

(単位：件数)

項目／年度	平成 16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	総 計	%
身体発育	9	11	26	40	43	47	101	145	138	138	698	6.1%
運動発達	8	21	30	24	23	25	24	14	13	20	202	1.8%
精神発達	43	70	108	138	135	93	108	96	95	105	991	8.7%
一般生理	34	84	143	155	191	185	159	146	131	118	1,346	11.8%
事故 （転落・誤飲など）	31	98	146	199	206	221	240	231	215	205	1,792	15.8%
栄養 （授乳～食育）	25	66	95	124	108	56	84	89	48	53	748	6.6%
日常生活 生活習慣	20	39	63	68	75	55	53	46	39	46	504	4.4%
疾 病	74	227	375	332	469	457	462	501	475	457	3,829	33.7%
予防接種	11	40	73	99	80	97	97	119	113	91	820	7.2%
家族関係その他	25	52	47	40	49	58	53	52	36	28	440	3.9%
合 計	280	708	1,106	1,219	1,379	1,294	1,381	1,439	1,303	1,261	11,370	100.0%

3. 相談者と対象児の年齢と属性と対応

相談者のほとんどは母親で、少数は父親、祖母、親戚で、年齢分布は20代14.9%，30代66.1%，40代12.2%で、相談対象児は0歳44.8%，1歳20.4%，3～5歳15.4%で、第1子67.6%，第2子19.1%，第3子2.9%，第4子以上0.5%で、大半が第1子であった。育児未

経験の母親で、育児支援者（祖母、姉妹、友人、近所の人など）が少ないと思われた。親の子育て不安を少しでも解消し、気持ちを和らげるように努めてきた。子どもと同様に父親、母親も、近所の人などとの関わり合いの少ない人が多いと思われた。親の子育て不安を少しでも解消し、安心、安全な子育てを目標にゆっ

くりと話を聞く態度で対応してきた。

これまでの相談内容で最も多い疾病3,829件のうち、最も多かったのは「熱が出たのですが、かかりつけの医院は今日休診です、どうしたらいいでしょうか?」で始まった。会話例を挙げると、「もしもしあんしんこども館の小児科医の〇〇です。」「何時からですか?」「体温は何度ですか?」「下痢、吐く、咳、不機嫌・食欲はどうですか?水分は摂取できてますか?」「オシッコの色は?」「体のどこかに発疹(発赤)は?」などを聞いて、「機嫌、食欲、表情の3点がいつもと同じなら重症度は低いでしょうが、この3点の変化が強いとかかりつけ医を受診したほうがいいですよ。」また「平熱なのか?発熱しているのか?を判断できるように普通の状態の時に1日の時間帯(朝・昼・夜)を3日間体温測定をして平熱を知っておくといいでしょう。」「当然、激しく泣いた後や入浴後は上昇しているのは当たり前ですよ。」「高熱が続くと、乳幼児ほど水分不足になりやすいし、そのうえ、水分が飲めなくなり、時に嘔吐が起こり、脱水状態になるので、予防的にかかりつけ医に解熱のための対策を相談しておくといいでしょう。熱が下がれば病気が治ったと思っている親がほとんどですが、症状がなくなっても病気は治っていません。発熱自体は感染に対する正常な反応ですが、原因がわかっていないので明日かかりつけ医を受診することを薦めます。」などである。

「転落した」との電話では、「いつ、どこから落ちたの?転落したのは何時?何cmの高さから?床はフローリング、じゅうたんやマットを敷いていましたか?転落時の姿勢は?どこを打ってそうですか?」などで返答は変わります。びっくりして、転落時の姿勢を答えられるお母さんはほとんどいません。不安そうなお母さんから話を聞きながら「1分くらいで泣き止み、その後はいつもと同じ機嫌で、けいれん・意識障害・嘔吐なしなら、そのまま安静にし、安静中に嘔吐をしたり、けいれんをしだしたら、直ちに救急病院に行ってください。何も起こらなければ、安静後2時間経ったらもう一度電話ください。その時に、今後の注意点を話します。」と返事し、「吐き続けるようなことが起これば脳外科を受診してください。」とアドバイスしている。

4. 乳幼児の事故の実態調査と保護者の意識調査

平成19~20年の京都市の全出生児23,712人を対象に

行った、2歳未満までの2年間に発生した事故調査では、ハガキでの回収率が低く³⁾、0歳児で2,510枚(10.6%)、1歳児では444枚(1.87%)に過ぎず、当初の目的である疫学調査には至らなかった。しかし、電話相談では把握できない数の事故や乳幼児用品での事故⁴⁾や、発育からは予想できない事故などの貴重な報告を得ることができた。事故に対する親の関心が高まった時点で再度繰り返し疫学調査を試みたいと思っている。

平成23年度には保護者の事故予防の意識を把握するため、4か月児健診における保護者のアンケートを実施し、乳児の不慮の事故対策はいつから開始すべきか検討した⁵⁾。その結果、妊娠中から、生まれてくるわが子の事故予防の学習を家族で学ぶ必要があるという結論となった。それにより、わが子を事故から守るプレママ・パパ教室の取り組みにつながった(後述)。

5. 事故防止の教育的活動・子育て支援活動

内容は講義1時間で「子どもに関わる事故の内容と防止」、「子どもの発達・発育の特徴」、「躰・育児不安の対応」、「児童虐待とその予防」などで、対象は看護師・保育士・幼稚園教諭をめざす学生や地域の子育て支援のボランティアなど、子育て支援活動に携わる全ての人々である。その後セーフティハウスの見学を30分~1時間で行っている。学校関係は例年、継続・希望があるので対応している。当館は公的施設では日本で唯一のためか、行政、特に消費者庁職員が不慮の事故との関連で見学が多かった。講義は小児科医が担当し、セーフティハウスの説明は保健師、看護師が担当している。来館者への配布資料として当館で編集した「子どもの事故防止実践マニュアル」、「子どもの事故の応急手当マニュアル」、電話相談例をもとに作成した3部の「小冊子」、「子どもの事故のチェックリスト」を無料配布している。

平成24年9月より、月1回、10組程度のプレママ・パパを募集し、セーフティハウスの見学と交流会を開催している。交流会では小児科医や保健師、看護師と一緒に、目前に迫った子育ての不安の解消や父親の役割、各家庭での事故防止策を検討したりしている。さらに平成25年4月からは助産師も交え、妊娠中の不安などに対してのアドバイスも受けられ好評な交流会となっている。

6. 講習会

講習会は年7回開催している。広報は市民新聞やホームページ、来館時などである。「お子さんの心肺蘇生法講習会」では子どもに発生しやすい事故とその対応、特に死亡につながる「交通事故」、風呂場での転落、転倒による「溺水事故」などを小児科医の講義で学習し、人工呼吸、胸骨圧迫をレサシベビー、レサシジュニアを用い体験してもらう。1回の受講者は30人で、5～6人のグループに1人の赤十字幼児安全法指導員の下に実習している。その他に地区消防署と共催で年1回行っている。

自転車用ヘルメットとチャイルドシート使用法講習会は年に2回開催し、小児科医の講義のあと、JAFの方々によるチャイルドシートの正しい装着の仕方指導と、幼児2人同乗自転車を使用し、京都府警察本部交通事故防止対策室の方々による正しい自転車の走行の指導を受け、実体験してもらっている。この時には参加者に幼児用ヘルメットをプレゼントしている。1回で修得できない人は複数回の参加も可。傍に倒れている子どもや大人がいたら、行って声をかける勇気を示すことができるかが自己評価のポイントである。講習後のアンケートによると評価は高く、講習会時は館内に乳幼児の保育室を設置しているため参加しやすいという意見も多くみられた。

7. 広報活動

TV、ラジオ、種々雑誌、新聞⁶⁾などで当館の施設や役割を紹介、また保健医療相談の集計結果や乳幼児の事故の実態調査結果などを連載でニュースにして京都市内の保育園、幼稚園、子ども支援センター、京都府医師会小児科医会などに配布している。

8. 満足度

これら事業に対する満足度調査は来館者個人や団体からのアンケートや感想文から評価した。保健医療相談事業では、特に、電話相談は匿名で顔を合わさないので、話しやすく、聞きやすいと言い、「わかりましたか」、「納得しましたか」、「他に気になることはありませんか」と確認できたら満足と判断した。ただ、診察はおろか患児の顔を見ることもない電話相談の限界（不安）は強く感じている。見学・説明では見学後にアンケートをお願いし、評価した。ほとんどの見学者はわが家に危険な場所の多いことにびっくりし、たい

へん参考になったとお礼を述べて帰られている。配布した「子どもの事故のチェックリスト」でチェックし、チェックのつかない部分は1か月を目標に改善を試みてくださいとお願いしている。子どもの事故に高い関心を持たせることができ、見学後のアンケート調査では効果があると実感している。

研修会参加者は、子どもに関わる施設の職員、医療関連、専門学校、子育て支援団体、育児グループ、サポートグループなどで、就職に関連する大学・専門学校のグループには講義、内容についてのアンケートや感想文を担当の教官から郵送されてきた結果で評価している。多くは内容に「びっくりした、育児不安、家庭内事故、児童虐待がこんなに多いことを知らなかった」、「今後、もっと前向きに勉強したい」との返事が多く、よい講義ができていていると思っている。当施設の設立目標はかなり達していると手応えを感じており、更なる充実を目標に頑張っていきたい。

V. ま と め

「全国に本館のような公的な施設がなぜ1ヶ所しかないのか？」遠くから見学に来られた人たちの中から、こんな声が多々あった。1研修室と1室のセーフティハウスがあれば、電話を利用して子育てに悩んでいる親や子どもの不安を解消できる。そして、セーフティハウスを見学、説明を聞き家庭内で発生する子ども、特に乳幼児の事故防止ができ、教育できる。その結果、親子とも安心・安全な生活を保てるのになあ、と私たちは思っている。

京都市では10年間の出生数が約11万人（平成16年京都市出生数11,764人、平成24年11,050人）とすれば、当館と接触した児の家族、10年間の37,414人全員が京都市の児とすれば大変な（34.0%）数字になる。全例が京都市で出生した児ではなく京都府や他府県からの児がいるし、リピーターもいるだろうが30%くらいの家族は当館の恩恵を被っていると思いたい。そのうえ、527回の研修会、61回の講習会には、今後、子どもに関わる仕事をする人たちは将来の母親・父親になる人たちでもあるため、講義では、子どもは発育し続けていること、子どもは両親の遺伝子を受け継いでいるために顔も性格も体つきも一人一人異なるが、親に似ていることや躾の大切さ、育児中の親の不安、児童虐待、家庭内での不慮の事故防止などの内容で教育や研修をしてきた。さらに、ファミリーサポートセンター

の人たちは家庭での子育ての援助者になるために教育をし、事故を未然に防ぐための教育を多数の人に提供してきた。このような試みで山の頂上から裾野へと子育て支援は広がっていくことを期待している。せめて各ブロックに1ヶ所の施設を設け、ブロック施設同士がネットワークを組み情報の提供・交換し、国主導でブロック下の各県に情報収集展示施設を設けると、身近な全国的なネットワークが構築できる。これらの仕事の情報収集と広報が、わが国で最も必要な子どもを不慮の事故から守るための疫学調査に繋がり、国全体で不慮の事故を減らし、少子化対応を考える手段として重要な役割を果たすと思われる。その目的に、死亡原因や子どもの未来を奪う事故として最多の交通事故の後遺症を少しでも軽症化するため、自動車同乗時のチャイルドシートや自転車乗車時のヘルメット着用を徹底し、他の窒息、溺水、転落、火事を防止し、家庭内での子育て支援での事故防止を身近で実践することを目指し開始したい。個人個人の努力の上に公的な支えがあれば、元気な赤ちゃんの出生、心身ともに健全な成長が期待される。Are Activities of the Kyoto Healthcare Counseling and Injury Prevention Center for Children from 2004 to 2014 effective? には Yes と返事をしたい。

京あんしんこども館の10年の結果から、子どもの事故防止政策が全国に広がってほしいと願っている。この施設設立の背景には隣接した京都第二赤十字病院小児科部長、同副院長の故水田隆三先生、故宇山理雄院長の事故防止への活動から出発したことを銘記する。

この報告には利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 澤田 淳, 京あんしんこども館の取り組み, チャイルドヘルス 2008; 11: 6.
- 2) 澤田 淳, 能勢 修, 高峯智恵, 他. 医療相談から見た子育て中の親の不安—5年間の結果—. 京都医学会雑誌. 2009; 56 (2): 137-144.
- 3) 澤田 淳, 大矢紀昭, 加藤康代, 他. 京都市での一般家庭における0歳児の事故調査の試み. 日本医事新報 2012; 4579: 25-27.

- 4) 加藤康代, 高峯智恵, 中辻浩美, 他. 乳幼児用品でも事故はおきる. 小児保健研究 2013; 72: 267-273.
- 5) 中辻浩美, 高峯智恵, 加藤康代, 他. 乳児の不慮の事故対策はいつから開始するべきか. 小児保健研究 2014; 73: 397-402.
- 6) 澤田 淳. 「赤ちゃんの事故」ご近所のお医者さん. 毎日新聞, 2010. 5. 29 刊.

〔Summary〕

Kyoto Health Counseling and Injury Prevention Center for Children (nick-name is Miyako-Anshin Kodomo-Kan) was established by Kyoto City government, in August, 2004. This center mainly has two missions: the first one is counseling for parents who have anxiety in childcare and need medical advice. The second is teach, and show to public how to prevent children's accident in daily life, by inspection of safety house arranged with affront door, a living room, kitchen, a dining room, a bath room, a bed room, a toilet, stairs, a doorstep etc., for an enlightenment and an education for parents about injuries at home. Visitors study that there are many dangerous areas and articles in the house. Furthermore, we present some panels of childhood-injuries to prevent injuries by our stuffs explanation.

In this ten years from 2004 to 2014, we have 26,042 visitors (Ave 2,600 per year) and numbers of consultation case were 11,370 (Ave 1,137 per year). A classification of visitors is as follows: 127 administrators, 183 nurses groups, students of nurse training school, nurse school, 67 teaching staffs of kindergarten, 135 healthcare group of children, 60 others and, 14,192 private (1,419 per year). Furthermore, pediatricians gave 633 lectures to them. Most visitors satisfied our presentations, we also monitored and analyzed their response by questionnaire about watching house, hearing explanation and lectures. We will analyze these results and will enlighten.

〔Key words〕

miyako-anshin-kodomokan, counseling for parents, prevent injuries, visitors, satisfaction